

幼児のことばについて



鍋島能弘

私はここで、幼児のことばというものを、主に言語学の立場から眺めてみたいと思う。言語学というのは一般に実際の言語現象・言語の実際の有様というものを取り扱う學問でありながら、昔からどちらかといえば、哲学の一部になり易いという傾向があつた。つまり言語学者は人間のことばに関するいろいろの理屈をつけて、そしてその理屈の中から何かを秩序だてていこうとするのである。さて言語学というのは、だいたいドイツあたりから元は発達した學問であり、そのドイツ人というのが、ちょっとと英米人の物の考え方と違つていて、概して理屈が好きであったために抽象論が非常に多い。したがつてドイツ人の學問は、実際問題を考えるよりか、先ずむしろ理論を立てていって、それを一元的にまとめていこうとする傾向がある。そのような点において日本の昔からの一般の學問のいき方にどちらかと言えば似ているところが多いようである。日本において、ことはの問題を取り上げた例はずいぶん古くからあるが、専門的な言語学という立場からとりあげたのは、明治時代からである。言うまでもなく日本は日本のことば特有なものがあるために、外国

の考え方をそのまま当てるわけにもいかない。そうかと言つて日本人は昔から科学的にものを考えるという精神に欠けていたために、どうしても一応は明治時代にヨーロッパの學問のまねをしなければ學問として成り立たない窮屈にはいっていた。したがつて言語の問題にしても、ドイツ人の学者のやつたものを取り入れながら研究を積み重ねてきたわけである。

幼児のことばに限らず、一般にことばの問題に関して言うと、それを解釈するのにだいたい三通りの方法があると今日考えられている。どういう気持から、あることばをしゃべっているか話す人の心理という立場から考えていく方法が一つ。それから例えれば、あるきれいな花なら花を見て、非常に深く感じ、それを歌にするとか詩にするとかといったような立場を主に考える場合、つまり美的価値の立場から考えていく方法が一つ。もう一つは観念とことばの関係を捉える方法である。例えは子どもがある感情を持つていて、それを外に現わし得ないような場合、子どもは、ほほえんだり、また涙ぐむことによつて自分の気持を外に現わす。たまたまそれがことばにな

つた時に、その観念とか考え方を主にして解釈する方法である。心理の立場からことばをみていくか、あるいは美的価値の立場からみてゆくか、または純粹にことばだけの問題としてみてゆくか、こうしてだいたい三通りの立場が普通に考えられている。最近の「一番新しい傾向は言うまでもなく、この心理的傾向である。そしてことばを単なる単語として現われる場合だけでなく、文章として現われる場合の心理も、文章心理学という立場から研究されている。われわれはだいたいこの三つの立場を頭において、その上で言語学において幼児のことばがどのように取り扱われてきたかを考えてみたい。

ヨーロッパの言語学を一九世紀と二〇世紀とに分けて考えてみると、ヨーロッパの一九世紀というのは自然科学の発達した時代であり、ことばの問題についても科学的にみてゆこうという気持が初めて現われた時代である。一九世紀もまだ初めの頃は子ども自体は極く自然な人間の姿であると考えられていた。これはフランスのルソーの考え方である。彼は「文明」というようなものは、むしろ人間の天性をやがていくものである。だから学校教育などもあまり型にはめないで、自由に教えた方が良い」という説を立てて、例の小説「エミール」を書いたのである。そしてこの考え方があることばとか、あるいは一般の子どもに関する見方にも最初から現われてきている。「子どもは何か神聖なものを持ち歩いている存在であり、人間の造り出したいわゆる機械的な力の及ばないような、何か

尊いあるものを持っている」という考えが出てきて、そのような立場から子どもの行動なり子どものことばなりをみていくとするのである。これは今からみれば一種の夢のような考え方であって、たしかにローマン主義の思想の最も良い特性を示している。つまり「ことばの精神」とか、また子どものことばはどういうふうに発達しているかを科学的に考えるのではなくて、むしろ子ども自体の価値といふものを非常に高く評価して、そして文明に対する自然の状態を尊敬していくという態度から、子どもの行動なり子どものことばなりをみていくわけである。これが一九世紀も半ば過ぎになると、そろそろ本当の意味における言語学がドイツに現われてきた。すなわち、ドイツでは最初からことばに関するある一つの理論を立て、しかもその理論の上で一番はつきりするのは何かと考えたのである。そしてそれは人間のことばの音の変化である。つまり音韻なのである。音韻は昔こうであったのが、後の時代にはこんなふうに変わつていった——というように音韻の変化を考え、その間に音韻学が発達してきた。それがだんだんと専門の学問として科学的資料に基づいて言語学という学問を打ち立てていったのである。

さてこれが二〇世紀になるといわゆる一つの専門の科学としてことばの学問——言語学が成立し、言語学者が出てきた。つまり二〇世紀になると言語というものの見方が学問的になつたのである。学問的になつたというのは、換言すれば、組織ができ、きちんとした体系を作つて、そして学問としての形式をととのえてきたということこ

とである。そして初めは音韻を扱っていたのが、それが今度は意味の問題、次に表現の問題というように発展してきて、今日に至っているのである。最近の言語学の一つのいき方として、象徴の問題が取り上げられている。つまり無形のものを有形なものによって表わすことである。例えば、子羊はやさしい従順な性質を表わし、ギリシャの女神ヴィーナスは恋愛を示すというような考え方である。これが二〇世紀の一つの進歩したことばの解釈である。専門的な言い方をすると、象徴とは二つのもの——精神的なものと具体的なもの——を結びつけているので便利なのである。

私が以上に述べたことは、言語学一般の発展の跡である。それではこの間で一体、幼児のことばはどんなふうに取り上げられていたか？ これがわれわれの中心問題である。先ず一九世紀の半ばから以前の時代では、幼児は何か清い神聖なものであると考えられていたために、幼児のことばを純粹にとり出してきて、分析したり研究したりする傾向は一九世紀の半ば過ぎになつてはじめておこなわれたのである。小さい子どもは信仰の念が深く、あどけない心の中に神聖なものを宿していると考えられたので、そう學問的に幼児のことばをとりあげることはなかった。しかし一九世紀半ば過ぎになつて人類学、考古学などの実証的学問が進むにつれて、人類の発達過程は、一個の個人の発達過程と似ていることに注目され、人類の歴史を個人の発達のプロセスからみていくとする考え方が出てきた。そしてことばの成長、ということも一九世紀の半ばころから大き

く取り上げられるようになり、最初に言語創造の問題がでてきたわけである。つまりことばを造り出すのはどんな過程でおこなわれてきたかを考えたのである。考えがあつてことばができるのか、ことばがあつて考えが出てきたのか、と長い間論じ合われていたが、それはにわとりと卵の関係に似ていたのであった。

そのうち、一九二〇年ごろ、ドイツの言語学者であったヘルマン・パウルが、「言語史」のうちで言語の発展の過程を細かに観察したが、さらに、デンマークの言語学者イエスベルセンがこの方面的研究を深めたのである。イエスベルセンの業績のなかで、今ここでとくに注目すべき点は、彼が幼児のことばを言語学の上で大きくとりあげ、要するに子どものことばは非常に重要な文化発展の役割を演じていると論じたことである。その後、ドイツの言語学者でありまた教育学者であるリンデが実際場面の細かいデータに基づいて、子どもによる言語創造の問題をさらに研究したのである。われわれおとなしの知らない間に、子どもたちは自分たちに都合のよいことばを自由に造り出している、とさえ考えられた。つまり一九世紀にはまだ非常に漠然としたものに過ぎなかつた幼児のことばも、こうして二〇世紀になると、「常に新らしいものを造り出すものこそ幼児のことばである」という考えに変わってきたのである。ここになると、幼児のことばは人間精神の表現として、幼稚ではあっても、一つの客觀的な事実として考えられ、ここに心理学とか教育学などの科学的研究の対象となってきたわけである。

(お茶の女子大学)